

提督に御指名が入りました

赤雪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

深海棲艦が現れて間もない時期、いくつかの国に艦娘が現れてこれから戦いの準備を整えようという時。

日本では

新堂 護（しんどう まもる）

庵原 智樹（いはら ともき）

真中 圭（まなか けい）

斎藤 秀一（さいとう しゅういち）

赤崎 慎二（あかさき しんじ）

の五人が提督として選ばれ、新人提督として戦いを挑みに行くのだった：

目次

第一隻	一名様ご案内です	1
第二隻	初めてだから優しくしてって言っただじゃない!	5
第三隻	指名された側が指名料払うってどんなシステム?	9
第四隻	やっぱり〇〇は最高だせっ!	14

第一隻 一名様ご案内でくす

深海棲艦が出没し始めて数年…今まで必死になって開発してきた人類の科学力の結晶ともいえる兵器が全く通用せず、ついに人類も滅ぶのかと思われ始めていた。

しかしそんな時に世界各地で「艦娘」と「妖精」なる存在が認識され、彼女たちが持っていた武器は深海棲艦を次々と追い払った。

彼女らは言った。

「私たちなら戦えます」

「海に加護が敵を守っているのです」

「妖精さんたちが私たちに海に加護を与えてくれるのです」

「私たちは特別な物質を海から掘り出して力に変えます」

「私たちは、提督を、そのご家族を、その故郷を、守ります」

『提督のお名前ですか？名前は…』

|| || || || || || || || || ||

俺、新堂護（しんどうまもる）は戸惑っていた。

朝一番でボロ屋のちやつちいインターホンを連打される。

何かの勧誘なら断った方が早いかと思いつつドアを開けると、

優男風な男とその後ろに映画やドラマとかで出てきそうな黒服が目に入る。

優男の口から聞いたこともないような組織の名前を出され、黒服のゴツイ男たちに囲まれながら車に乗せられる。あつという間だ。

なんだこれ？怖えよ！力めつちや強！肩掴まないで痛い！

そして車で何処かへ移動する最中、天皇陛下がどうか海軍がく艦娘のくなどと説明を受けるが、全く話が頭に入らないくせに不穏な単語だけ聞こえてくる。

頭を使うのは苦手なんだよ！

俺は所謂落ちこぼれに属する人種だ。

勉強なんてできやしないし、運動神経は並くらいだがじゃあ部活に打ち込んでいるのかと聞かれても下を向くしかない。

幸い友達だけは多かったが、その友達と共に高校を中退して不良の道を歩んでいたはずだ。

それが今日、何故か俺とは正反対のめちやくちやエリートそんな人と対面していた。

高官「あー、君が新堂護君かね？」

護「あーハイ、そつすけど…」

高官「今からとても真面目な話をする。君にとっては冗談に聞こえるかもしれないが、どうか真剣に聞いてほしい。深海棲艦が日本の近海にも出没し始めたことは知っているかね？」

護「まあ、先週ニュースでやってたつすから」

高官「そうだね。だが、我が国日本はつい先日漸く深海棲艦に対してのみの武力の保持が主要各国から認められたばかりだ。今から士官を募集し、教育を施してはとて間に合わない。そのうえ艦娘を指揮する人間は艦娘に選ばれた者だけなのだ。ここまでは理解してくれたかな？」

護「は…はあ、なんとなく？」

高官「……とにかく、我々には時間がないのだ。君を育てている時間が」

護「へあっ!?!」

高官「君はとある艦娘に提督としてふさわしいと選ばれたのだ。だが君を一軍人として育て上げてから着任させるには時間が足りない。だから君には今、すぐにでも提督として着任して貰いたい。」

護「あの一、なんか色々とステップをすつ飛ばしてる気がするんすけど…」

高官「これは日本の、いや世界の未来を左右する重大案件だが、大丈夫だ。君が何か重大な決め事をする必要はない。我々が決めた命令を彼女たちに下してくれるだけでいいんだ。」

護「おっさん、テンション高いって…」

高官「頼む、どうか、どうかっ!」

そう言っつて土下座までするおっさん。

多分このおっさんは、ちゃんとした学校生活を送って、こんな工

リートが集まりそうなところに就職して、そんな真面目で一生懸命な人生を送ってきたんだろう。

そんなエリートおっさんが、もう20近いのにフラフラしてるようなガキに頭を下げ、必死に頼み込んで…

そんなん…そんなん…

護「ことわれるわけねーじゃんかヨオ…」

俺はボロ泣きしながら承諾していた。

|| || || ||

高官「改めて、自己紹介が遅れてすまない。私は天野遼（あまのりょう）という。これからは君の上司になるね。よろしく。」

護「俺、新堂護つす。よろしくつす。なんかすいません、感極まって泣いちゃって…」

天野「いやいや、調査通り情に熱い男みたいで感心したよ。倅にも見習わせたいくらいだ。」

護「せ…がれ？ってなんすか？」

天野「…え？あ…ああ、息子のことだよ。君の少し下くらいなんだが、友達を見下している嫌いがあつてね。困り者だよ。君みたいに友達を大切に出来る男になつてもらわんと。」

護「いや、俺なんてそんな…」

天野「そう謙遜するでない。早速ですまないが、どうだい？君の艦娘と会ってみないかい？」

護「そういや、なんで俺が提督だつて…」

天野「艦娘がね、指名したんだよ。君の名を、ね。じゃあ呼びに行つてくるから少しここで待っていなさい。」

そう言つて天野さんは部屋を出て行った。

|| || || ||

天野「ふう、調査通りの男で助かったよ。人望があるとは聞いていたが、あそこまでくるともはやお人好しどころじゃないな。まあ彼のそういうところを利用してしまったわけだが…」

??「そんなことより早くあの子のところに行つてあげなさいな。きつと報告を心待ちにしてるはずだから。」

天野「そんなことって…まあ、君たちにとってはそうだったね…」
そう言って天野は女性と二人、通路を歩いて行った。

|| || || ||

「艦娘かー、どんな子なんだろうか…」

そう呟いてまだ見ぬ自分の部下を想像してみる

やっぱ王道は部下って感じの凛々しい人かなあ…

それとも尽くし系の頑張りっ子だろうか、はたまた疲れた自分を癒してくれる柔らかい物腰の子だろうか…

ドジっ子…はめんどくさそうだからいいや。

「まあ、どんな子でもきつといい子に変わりはないさ。」

などと呑気な事を考えていると足音が聞こえてきてドアの前で止まる。

コンコンつとノックする音とともに天野さんが声をかけてきた。

天野「新堂君、彼女の希望で少しの間君と二人きりで話したいそう
だ。私は隣にいるから話が終わったら来なさい。」

護「はい、わかりました。」

二人きりで？なんの話だろうか？

考える間も無くドアノブが動く。

ガチャつとドアを開けて入ってきたのは…

吹雪「はじめまして！特型駆逐艦1番艦の吹雪です！よろしくお願
いいたします！」

元気の良い芋だった。

第二隻 初めてだから優しくしてって言ったじゃない！

僕、庵原智樹（いはらともき）は困っています。

智樹「あのー叢雲さん：そろそろ機嫌を直していただいても…」

叢雲「そんなこと言ったって！あんな自信満々で出撃して一撃で中破撤退って！」

智樹「まあ気持ちはわかりますけど…」

深海棲艦に対抗するため、日本は艦娘たちを所属させる組織を設置した。

防衛省対深海棲艦特別海軍本部：通称大本営。

僕はこの組織の提督という地位に就き、日本の5つの防衛拠点のうちの一つである青森県の大湊にある警備府で艦娘の使役を任されている。とはいえ、そんなに偉いわげじゃない。

大本営から出される指示を艦娘にそのまま伝えるだけのクツション役のようなもので、艦娘は自身の選んだ提督の言うことしか聞かないため仕方なくこのような形を採用している。

まあかろうじて天野さんの言うことは聞いたり聞かなかつたりするらしいけど…

その天野さんは日本で初めて艦娘を発見したとされ政府から大本営の長に任じられている。

かなりの軍記マニアでかつ海好きらしく、防衛省で仕事をす傍ら旧日本軍（特に海軍）の記録を漁ったり、時折ご実家に帰られてはまだ深海棲艦の目撃情報がそんなになかったとはいえ、漁師のお父さんと共に危険な海に繰り出したりしていたらしい。艦娘を発見したのもその時だそうだ。

そんな天野さんや軍隊知識を持つ自衛隊の偉い人たちが僕に、もとい僕の従える叢雲さんに出した最初の指令が『まずは西方近海へと出撃し、100マイルほどで引き返せ』というものだった。

西方ということだったので陸奥湾をでてロシア、中国側へ向かい少

ししたら引き返す。なるほど。たしかに最初の出撃にはふさわしいかもしれないと、安心して送り出した。

が、ちやうど引き返そうかというところだった。

小さな深海棲艦と思しき影を発見した。

すぐさま報告すると、『迎撃せよ。但し、被弾すれば直ちに撤退せよ。』と返ってきた。

これを叢雲さんにそのまま伝えると、『見てなさい！やってやるわ！』と意気込み戦闘を開始する。

着弾と敵の小破報告が入ったその直後に反撃を食らってしまった。

即座に撤退命令を出し被害状況を報告させるとただ一言だけ、『中破よ…』と返ってくる。

こうして僕と叢雲さんの最初の出撃は苦い敗走となった。

叢雲「ごめんなさいね…せっかくアンタに司令官になってもらったのに…駆逐イ級に一撃でやられちゃうなんて…」

智樹「げ…元気出してくださいよ叢雲さん、初めから全部上手いくなんてことはないんですから。」

叢雲「うん…」

智樹「それに、中破で済んで良かったです。もし叢雲さんが帰ってこなかったらと思うと…」

叢雲「…そうよね…わたしは帰ってこれた。アンタにもまた会えた。つまり次があるってことよね。なら今やるべきことはその次に向かって精一杯準備すること！いつまでもくよくよしてらんないわ！」

ふう、なんとか立ち直ってくれたみたいだ。

叢雲「ただ…ちよつといいかしら？」

智樹「はい、なんですか？叢雲さん。」

叢雲「その叢雲さんってのやめてちやうだい！アンタは司令官で、わたしの上司なんだから！」

そうは言っても一体どう呼べば…叢雲殿…は流石に無いな、叢雲…君？でも女性に対して君は…いやでも男女問わず君付けで呼ぶ上司がいるって話も聞いたことあるし…

叢雲「あーもう何悩んでるのよ！呼び捨てでいいじゃない！あとその敬語もやめなさい！」

智樹「ええー、…じゃあ…む、叢雲っ！」

叢雲「っ！そ、それでいいのよ！」

呼び捨てはあまり好きじゃないが、叢雲がそれでいいと言うのならいいのだろう。

しかしそこであることに気がついた。否、気がついてしまった。

お腹が丸見えなのだ。

さつきまでは蹲っていたから気づかなかったが服の大部分が破けてしまっている。

幸い大事なところは見えていないが、ここまで肌を晒してしまうのは良くない。

智樹「えと、じゃあ叢雲…取り敢えず入渠してきてくれる？急ぎで。」

叢雲「へっ？…あ、あ、アンター！もつと早く言いなさいよ！このバカー！」

真っ赤になった叢雲の叫び声とともに顔面に砲塔をくらい、僕は意識を手放した。

||||||

「もうっ、まさかあんなに丸見えになってたなんて：／／／

でも流石に主砲で殴りつけたのはやり過ぎだったわね…アイツ気絶しちやったし…あとで謝つといてあげないと。」

そう呟きながら湯船に浸かる。ドックが風呂の形態をとっているためだ。

少し熱いお湯が冷えた体と疲労した心に浸み込んでいく。

アイツ…最初はあるまりパツとしないなどか思ってたけど…悪いヤツじゃないみたいだし、もう少し優しく接してあげてもいいのかな。

ここ2日間アイツが敬語を使うせいで、もともとの性格もあるんだろうけど…ついでに命令口調になってしまう。

昔それで失敗したと言うのに…

そういえば、他の子らは自分の司令官と上手くやってるのかしら…
特に吹雪なんか、最後まで司令官が見つからないって嘆いてたっ
け。

思い出したらなんだか会いたくなってきた。

叢雲「あとで司令官に相談してみようかしら…」

第三隻 指名された側が指名料払うってどんなシステム？

僕、真中圭（まなかけい）は後悔していた。

事の起りは3日前…

深海棲艦の出現の影響により世界中が不況に陥った。

日本国内では深海棲艦による被害はまだ無いため諸各国ほどでは無いにしろ、社会不安は増大して行き、僕のような大学生は就職氷河期真っ只中だ。

そんな時だったからだろうか。防衛省のお偉いさんが家を訪ねてきて、提督になれと言われて直ぐに了承した。してしまった。

職が決まるというだけではなく艦娘という可愛い女の子に囲まれて仕事をするというのは魅力的だった。

おまけに艦娘本人が僕を指名したのだとか…

こんなので浮かれない男がいるものか！という気分で即日着任。

仕事場が横須賀とはなんとツイていることか。

聞いた話によると他にも提督が居るらしいが、ソイツらは東北だの九州だのに行かされたらしい。

だが地獄はここからだった。

五月雨「ていとくうくやつと見つけましたあ♡もう逃がしませんからねえ♡」

圭「五月雨ちゃんさあ…トイレ行ってくるだけなんだから執務室で待つててくれても…」

五月雨「でもわたし…本当は1秒たりとも提督と離れたくないんです…」
す…」
へ●●△△
く

いやそれでも出待ちは引くつて。というかその目ヤメテ怖いから。僕の初期艦である五月雨ちゃんという娘はこの通り色々ヤバイ。初めて会った時は真面目そうでちよっぴりドジな可愛い娘だったんだ。

『提督、お荷物お持ちします。』と言って着替えの入ったトランクを

持ってくれたあと施設内を案内中に転んで中身をぶちまけちゃったり、食堂のキッチンで調味料をを準備する際に砂糖を入れた容器に塩と書かれたシールを貼ってしまったり。

ところが一転次の日の朝俺を起こして『提督！一緒に執務しましょう！』と言ったにもかかわらずその手に持っていたのは何故か首輪だった。

その後もトイレに籠って5分ほど奮闘していたら個室の扉を100回くらいノックされるし、昼時に『提督、あーんしてください』とお願いされた時はオムレツを乗せて差し出したスプーンを1分以上啜え続けたり。

挙げ句の果てに出撃や遠征に行かせた後『提督と離れて寂しかったです』とか可愛いこと言ってるくせに僕の手と自分の手を手錠で繋げてみたり。

好意はイヤという程感じるが、それ自体は嬉しいのだ。この娘も根は素直なんだろうということが一緒に暮らしてなんとなくわかる。

だからこそちよくちよく挟んでくるヤバい行動が余計に怖く感じられてしまう。

そして今一番不安なのは…

圭「えーと、今日の大本営からの指令は…『遠征によって集めた資材を使い、艦娘1隻を建造せよ』か。」

五月雨「建造…」

やっぱり反応するか…

さつきも言ったがこの娘が僕に好意を抱いていることは自惚れではなくなんとなくわかっている。

ここは鎮守府で、これから深海棲艦との戦争の準備を進めて行かなければならない。戦力増強のために人員補充があるのは分かっていた事だ。

だが人数の変化は人間関係の変化に直結する。

彼女が新しく増えた娘に何かしたりしないだろうか。またその逆はないか。

圭「ま、ここで悩んでいても仕方がない。さつきと建造しに行こう

か。」

五月雨「(ビクッ)わ、わかりました。」

五月雨としてはおそらく、二人だけのこの状況が失われるのが怖いんだろう。だけど僕は逆にこの建造には希望を見出しているところもある。

彼女をうまく諫めて僕との仲を取り持つてくれるような娘なら完璧だ。そうでなくとも、五月雨のことをわかった上で悪戯に引つ掻き回すような最悪な状況にさえならなければどんな娘だろうと大歓迎だ。

圭「妖精さーん、いるかい?」

妖精「…」ひよこっ

妖精さんは鎮守府のいろんなところにいるらしいが、普段はその姿を現すことはない。

だがここ、工場にいる妖精さんは建造や開発、解体を行う時に呼ぶと出てきてくれる。

他にも、入渠の準備をする時や執務室で家具を設置する時なんかも出てきて手伝ってくれた。

圭「建造をお願いしたいんだけど、いいかな?」

妖精「…」コクコク

圭「じゃあ貯蓄してある資材からオール30でお願い。」

妖精「…」(???) ッビシッ

妖精さんと言葉を交わすことはできないけど、こちらの言うことは理解してくれるしジェスチャーでリアクションもしてくれるので意思疎通に支障はない。

工場の奥には小さな小部屋のようなものが4つあり、妖精さんがそちらへトコトコと歩いて行くとそのうちの1つに入る。

すると直ぐに部屋のドアにある小さな横長の電光掲示板に「00:20:00」と表示され、カウンtdownが始まる。

どうやら建造は20分程で終わるようだ。

ちなみに資材の数値は大本営から配布された早見表から選択している。

とはいえ1番上に燃料30、弾薬30、鋼材30、ボーキサイト30と書かれているだけで表としての役割は果たしていない。

と、そこで2枚目の書類に気づく。

そこにはこう書いてあった。

『現在艦娘の建造において法則性等はみられていない。そこで提督諸氏には鎮守府運営に支障をきたさない範囲で建造をし、その1つ1つを報告してもらいたい。これをデイリー建造と呼び、可能なら毎日行つて欲しい。なお、妖精さんからの話によれば資材は10単位しか調整できず、各30は必ず必要だとのことだ。データの集積により更新が必要と考えればまた新たな表を送付する。』

なるほど、要はこの表を埋めろつて事か。

今は五月雨の遠征一回分しか資材が集められてはいないが艦娘を増やせば回収効率が上がつてより多くの資材で試すことができる。

だが深海棲艦との戦闘があれば補給や入渠修理に資材を使い、建造が難しくなる。

数が少ない今は無用な出撃は避けねばならない以上、建造優先で遠征効率を高めるのが当分の目標つてところかな。

五月雨「提督、そんなに新しい子が楽しみですか？」

圭「楽しみじゃないつて言えば嘘になるけど、それだけじゃないよ。当面の方針が決まつてやるが増えてきて、ちよつとワクワクしてきましただけだつて。」

五月雨「そう…ですか…」

なんだろう。妙に元気がない…というか落ち込んでる？

普通の五月雨も、怖い目の時の五月雨も、そこには元気があつたはずだ。

落ち込んでる五月雨は…見ていたくない…

圭「なあ、五月雨、今夜はちよつと外食しないか？」

五月雨「え？そ、それつて…良いんですか？」

圭「僕と五月雨がデートに行つても誰も文句なんか言わないよ。」

五月雨「やつたー！」

パアアと五月雨の顔に笑顔が戻る。
が、ふとここであることに気づく。

建造をしたということとはつまり、人員が増える。

流石に建造初日の娘を放って外食は良くないし、3人で行くか？

??「へえー、楽しそうな話じゃないか。僕も一緒に行きたいな」

僕は、後悔している。

時雨「僕は白露型駆逐艦2番艦の時雨。これからよろしくね。」

自分の流されやすく、人の気持ちをあまり深く考えないこの性格
を。

|| || || ||

―報告書 建造記録

横須賀鎮守府 真中圭

投入資材 燃料30 弾薬30 鋼材30 ボーキサイト30

出現艦娘 白露型駆逐艦2番艦 時雨―

天野「そうか…時雨君は真中君を望んだか…あそこも大変になるな
…」

第四隻 やっぱり〇〇は最高だせつ！

俺、斎藤秀一（さいとうしゅういち）は焦っている。

秀一「クソツ、間に合ってくれよ……」

そう呟きながら作業の続きを急ぐ。

秀一「電と響が帰ってくるまであと10分、歓迎会の準備を終わらせて迎えに行かねーと！」

今朝、俺の初期艦である電の姉の響が着任した。

大本営から近海に出撃しろとかいう指示が出ていたから朝一番で出撃させた。

朝一なのは俺がそうしたかったからだ。

朝は早く起きる。早く起きて、早く仕事を始める。そして午前中に仕事を終わらせて、午後はたっぷりある時間を楽しむ。そして夜は早く寝る。それが俺のポリシーだ。

そのため電には朝っぱらから出撃してもらうことになった。

それが良かったのか悪かったのか、手負いの敵を発見した。

電の話によると折り返しの前に右手から流れてきたそうだ。

ここが舞鶴でその正面を真っ直ぐに行って帰ってくる予定だったことを考えれば、潮の流れ的に北から流れてきたのだろう。

手負いでも手加減するな、キツチリ沈めてこいと指示したら砲撃した後泣きながら帰ってきやがった。

女を泣かせるのは趣味じゃねえ。

すぐに訳を聞いたら、『沈んだ敵も、できれば助けたいのです。敵艦さん、すごく寂しそうな目をしていました。』とかいうもんだから当然即補給して再出撃だ。

俺も救助船で電の後を追った。

すると戦闘した地点になにやら白いモンが浮いてやがる。

艦娘らしきモノ。直感的にそう感じた。

電が引き上げて俺の船に乗せて鎮守府に帰る。

拾ってきたヤツをドックに入れてる間に報告書を書く。

とその間に電が青い顔ひっさげて執務室に入ってきた。

どうしたと聞くと自分の姉だという。報告書にはありのままを書いて写真付きで送ってやった。

そしたら『暁型の響で間違いない。敵を倒すと稀にそういうことがある。今度からはその現象をドロップとし、戦果報告に記載せよ』とか言っけやがった。ヤツら何か隠してやがる。

そんな経緯を経てウチの所属が電と響の2人になった。

歓迎会でもやるかと思いい立ち、準備のために2人を遠征に出す。

料理やら部屋の装飾やらをやってる姿は見られたくねえ。

そういうわけで俺は焦っていた。

秀一「そろそろか…」

電「司令官さん、ただいまなのです。」

響「司令官、ただいま。」

パアン！とクラツカーを鳴らす。

秀一「お疲れ！迎えに行っけやれなくて悪かったなあ。」

電「えっと、司令官さん…これは…」

秀一「歓迎会だよ歓迎会。丁度昼飯の時間だしね。」

電「じゃあ響ちゃんは…」

秀一「ああ、遠征の間に書類関係の手続きも終わってな。正式にウチに所属することになった。改めて、舞鶴鎮守府へようこそ。これからよろしくな。」

響「こちらこそよろしく。それより、わざわざ用意してくれたのかい？」

秀一「ああ、思ったより手間取っちゃったがな。」

響「司令官…ありがとう。」

そう言っけ響はニコツと微笑む。

秀一「ふむ、やはりかわいいな。」

響には電とはまた違った魅力がある。

人形のようにやや無表情気味だったが、それが柔らぐとギャップ萌えという程ではないにしろ普通よりも余計に可愛く見えてしまう。

ちなみに電は気が和らぐような「ふにやつ」という擬音が似合いそうな微笑みで癒しを与えてくれる。

響「ねえ電、司令官つて口…」

電「響ちゃん、それ以上は自分にもダメージが返ってくるのです…」
おつとうっかり呟いていたようだ。

それを聞いた二人が何やら耳の痛いことを話しているが敢えてスルーしよう。あくまで敢えて、だ。

秀一「さ、二人とも席に着こう。響はそつち、電はここな。」

俺がそう言ったことで二人が移動する…が、響の動きが停止する。

響「…電、司令官、なんだい？ソレは。」

秀一「うん？コレか？メシ食うときはいつもこうなんだ。まあ慣れろ。」

響が呆れながら指をさしたその先には俺の膝の上に座り顔を赤らめる電がいた。

電「お…お食事のときはいつもこうしてもらっているのです／＼」

響「電、今すぐこつちに来るんだ。すぐに救急車とパトカーを呼ばないと。」

秀一「残念ながら元帥も了承済みだ。」

響「ぬうおアアア!!!私の電がアアア!!!」

秀一「急に叫ぶな。あとお前のじゃねえ、俺のだ!」

電「響ちゃんも司令官さんも一旦落ち着くのです。」

なんて事だ。まさか響までコツチ側の奴だったとはな。

こりやいきなりかなりの強敵だぞ…

響「私を司令官と一緒にしないでくれ。その変態と違って私はガチレスなだけなんだ!」

電「いきなりカミングアウトしないでなのです。そ、その、響ちゃん
の気持ちも嬉しいですけど…わたしには司令官さんが…」

秀一「ま、そういうこつた。諦めろ。」

響「クツ、まだだ。まだなにか手があるはず…」

しょうがない、ここいらで手を差し伸べてやろう。

秀一「響、コツチ側に来れば俺が優先なのは譲れないが、一緒に電
を愛でる権利をやるうではないか。」

電「司令官さん?!?!」

響「交渉のつもりかい?司令官。」

秀一「交渉じゃあない。情けをかけているのさ。」

響「くっ…」

フツ、迷っているな。もう一押しか…

そう思ったところで…

電「もうー、喧嘩はダメなのですー!」?(^、^、?)?

コレで諫めているつもりなのだろうか。かわいい。

だがまあ、これを見た後じゃ争う気も削がれる。確かにそういう意味じゃあ効果覲面だな…

秀一「響、ここは一時休戦としよう。」

響「そうだね。交渉は昼食の後にしようか。」

まったく、まだ二人だというのに…これから人数が増えればもつと賑やかになりそうだな。

そう思いながら響の歓迎会を再開した。

当然のことながら、電は俺の膝の上で飯を食ったので向かいに座る響の視線がずっと不満げだった。

翌日…

雷「雷よ!かみなりじゃないわ!そこのとこもよろしく頼むわねっ!」

暁「暁よ。一人前のレディーとして扱ってよね!」

神よ…俺は今まであんたを信じたことなんてなかったが、これからは最上の信仰を捧げよう。

こんな可愛い子達に囲まれるなんて、やっぱり駆逐艦は最高だぜ!